

盒で炊いたりして飢えをしのぐ兵が数多くでてくる始末でありました。

また、食器洗場で、水溜まりに流れ残りの米粒を拾い集めて食う新兵の姿を見せつけられる時期もあったほどです。

訓練の厳しさは、実戦の時に役立つものですが、内務班での私的制裁は厳しく禁じられていたはずですが、質の悪い古参兵などは、初年兵をいじめることを日課にしていたようでした。

この悪習が次から次へと申し送られたわけですが。これは、戦友愛を強くするものではなく、かえって反発を強くして、団結を弱めていった場合が多かったと思います。戦闘で苦しむのではなく、内務班の馬鹿げた制裁で辛い思いをした初年兵も多かったことでしょう。

私たちは、上海で実戦の経験を持ったので、いざとなれば上性骨はできていたから、何とかしのぎながら召集解除になりました。

## 満州最北端 三年三か月の苦しみ

山梨県 末木定松

私は大正八年七月九日生まれ、昭和十五年一月十日、東京・世田谷の東部十三部隊野砲兵隊に現役兵として入営しました。

一週間は注射、注射の毎日で、一月十八日品川駅から軍用列車に乗ったが行先は分かりません。静岡の大火の翌日だったと思いますが、あちこちの残り火の煙を見ながら、名古屋―下関―釜山―満州国黒河省孫吳に到着、さらに待っていたトラックに乗り、山道を一時間ぐらい走り、満州国最北端の法別拉陣地に到着したのは一月二十五日の夜半だったと記憶しています。

その陣地は、高い山の稜線が延々とつづき、そこに横穴が掘ってあって、眼下は黒龍江、河幅五、六〇〇呎という地形でした。

それから初年兵教育が始まりました。零下三〇度とい

う寒さと厳しい教育によって、日ならずして体の故障を訴えた同年兵が「貴様はたるんでるんだ」とビンタを食ったのでした。

谷間の水を割り、水の上で二、三年兵の洗濯もしました。やがて一年が過ぎ、孫呉に転属した。二年兵になったものの、ここは三年兵や召集兵がおり、少しは楽がでさると思つたものの駄目でした。

一月から二月にかけては冬季演習があつて、満州で一番寒い時期で、零下三〇度どころか、五〇度ぐらいあつたのではないかと思ひます。時には、昼夜通して行軍し、初年兵は凍傷になつて指を切断したものもありました。

汚い話だが、小便をすればすぐ凍り、九〇×一二〇の箱が下にあり、たまればそれをソリを引いて捨てにくく。兵舎は煉瓦造りでペーチカがあつた。楽しみはあん巻を食べるぐらいだった。

陣地はトーチカではなくて、地下ではなく横に壕が切つてある。黒河まで行くと、ソ連領ブラゴエンシエンスクが対岸にあつて、そこからは平地だった（上流は山岳地）。

冬の演習は一週間ぐらい続く、つらかった。野砲を六頭の馬で引くのだが、ある時、中隊長が指揮をしていた時、乗馬が暴れて落馬、そこを砲車がひいてしまひ亡くなつたという事故が忘れられない。野砲の挽馬は「前へ」と号令がかかる。「進め」を待たずに出る準備をするような利口なのですが。

野砲隊では将校、下士官、馬、兵隊といわれていました。兵隊一銭五厘、馬三〇〇円などともいわれ兵は最下位だったわけです。弾丸の飛んでこなかつた満州だったが、とにかく寒さと訓練の苦勞の連続の三年三か月でした。戦場の方が楽な場合もあつたらうと、今でも思ひ出します。昭和十八年三月、満期除隊して満州から帰り、昭和二十年七月、千葉県九十九里浜の野砲隊に召集され、終戦を迎えたわけです。